

王军彦 编著

新编日语写作

日本語で文章を書こう

上海外语教育出版社

新编日语写作

新编日语写作

日本語で文章を書こう



新编日语写作

王军彦 编著

新编日语写作

日本語で文章を書こう



上海外语教育出版社

图书在版编目(CIP)数据

新编日语写作/王军彦. —上海:上海外语教育出版社, 2000
ISBN 7-81046-771-9

I. 新… II. 王… III. 日语—写作—高等学校—教学
参考资料 IV. H365

中国版本图书馆 CIP 数据核字(2000)第 10543 号

出版发行: 上海外语教育出版社

(上海外国语大学内) 邮编: 200083

电 话: 021-65425300 (总机), 35051812 (发行部)

电子邮箱: bookinfo@sflep.com.cn

网 址: <http://www.sflep.com.cn> <http://www.sflep.com>

责任编辑: 江龙娣

印 刷: 中共上海市委党校印刷厂

经 销: 新华书店上海发行所

开 本: 850×1168 1/32 印张 13.75 字数 343 千字

版 次: 2000 年 9 月第 1 版 2003 年 6 月第 3 次印刷

印 数: 5 000 册

书 号: ISBN 7-81046-771-9 / G · 886

定 价: 19.00 元

本版图书如有印装质量问题, 可向本社调换

前 言

能否运用准确流畅的日语书写文章,可以说是衡量日语专业毕业的大学生是否合格的标准之一。因此,在高年级一般把写作课作为一门独立的课程单列出来。其目的是为了培养学生使用准确流畅的日语书写各类实用性文章的能力,也是为学生撰写毕业论文和毕业后做好工作打基础。

在日语教学中写作是一个难点和比较薄弱的环节。一般学生一提起写作文总是不知从何入手,写些什么,怎样来写。而教师也往往把握不好要讲些什么,从何讲起,或者干脆把写作课交给日籍教师来教。之所以产生此种局面,其重要原因之一恐怕是缺乏有关日语写作方面的教材和参考书。本书正是针对这一情况,根据《高等学校日语专业高年级阶段教学大纲》(试行本)的有关要求,参考了大量有关写作的中日文书籍,专门为大学日语专业本科生高年级的写作课教学编写出来的辅助教材。当然也可供具有同等以上水平的日语学习者和教育者作参考书用。

本书由准备篇、实践篇和论文篇三部分组成。准备篇又分两部分。第一部分是关于写作的基础知识,内容包括文章与文体、文章的主题、段落、语句和写文章的步骤及书写基本规则、注意事项等。第二部分是有关提高文章表现力的部分,内容包括文章标题的确定法、文章内容结构的构思和一般修辞法等。通过这些内容的介绍可以使学生从总体上大致了解写作的有关知识,为下一步进行写作实践打下基础。在实践篇主要针对学生的写作实践,分十三次按文章体裁类别由浅入深地分别介绍了命题作文、日记、书信、缩写、随笔、感想、游记、报导、说明、合同、报告、论说等文章。

每次按文章特点分析、注意事项讲解、文章实例列举、课后作业要求的顺序安排。通过约一年的教学,可以使学生了解现代日语中以上各类实用性文章的文体特点、篇章结构、修辞手段、写作技巧等,掌握这些文章的写作要领。并且通过教师批改作业、课堂讲评等手段,可为学生撰写毕业论文打好语言基础。本书因为是写作指导教材,所以列举了各种文章的实例,有些还使用了学生自己写的作文,也许称不上是范文,但对于学生撰写同类文章会有启示作用。另外因为读解不是本书重点,所以没有准备读解练习题。但可以根据授课时间情况,将文章实例用于读解练习。论文篇分两部分,第一部分主要针对学生写毕业论文前的准备工作讲述有关注意事项,第二部分详细讲述了写论文的方法步骤、文章结构、注意事项等,使学生读后可以了解到有关写论文的详细知识,增强信心,帮助学生较顺利地地完成毕业论文。

编者认为文章的好坏应从标点符号、用字用词、语法句法、文节段落、修辞方法、篇章结构等多方面来全面考虑。但因为日语专业基础阶段的教学一直是将语法句法作为教学的重点,而本书是高年级的写作辅助教材,所以基本没有安排关于语法句法方面的详细解说。这也是为了将语法句法问题留给任课教师根据学生实际情况进行讲解和讲评。当然,这本书作为教材还有不少缺点和不足,任课教师使用时可根据情况灵活安排内容顺序,也可进行补充、修改或删除。同时,真诚欢迎读者直接向编者提出批评意见,以利进一步修改完善。

在编写本书过程中,笔者参考了许多学者的著作或文献,也受到了李致中教授、张云多教授的热心指导。同时,日籍专家堀内正范先生提供了不少参考资料,胡振平教授一直关心鼓励本书的修改和出版工作。在此谨对本书所参考的著作和文献的作者以及给予关心鼓励指导帮助的各位老师表示诚挚的感谢。

编著者 王军彦

1999年5月

目 次

準備篇

第一章 文章を書くための基礎知識	1
第一節 文章と文体	1
一、文章とは	1
二、文章の種類	2
三、文章の文体	4
四、書き言葉と話し言葉	7
五、男性語と女性語	10
第二節 文章を書くには	16
一、文章を書く手順	16
二、文章の主題について	19
三、文章の段落について	24
四、文の作り方について	29
第三節 書くときの基本ルール	38
一、表記上の注意点	38
二、原稿用紙の使い方	67
第四節 良い文章を書くために	75
一、良い文章の基準	75
二、良い文章を書くためには	75
三、良い文章を書くための注意点	77

第二章 文章の表現力を高めるには	85
第一節 題名の付け方	85
第二節 文章の構想について	90
一、構想とは	90
二、構想の類型（文章構成の一般的な型）	90
三、論理的な構想	101
四、修辭的な構想	102
五、文章の書きだしと結び	103
第三節 一般修辭法	109
一、比喩的修辭	109
二、強調的修辭	114
三、変容的修辭	122

実践篇

第一章 課題作文	130
題名：「私の履歴書」	
字数：800字程度	
参考実例	131
第二章 日記文	137
一、日記文の特質	137
二、日記文の効用	138
三、日記文の種類	139
四、日記文の文体	139
五、日記文を書く要領	140
六、日記文の実例	141
第三章 書簡文（1）	151
一、書簡文の特質	151
二、書簡文の種類	151

三、手紙文の基本的な構成	152
四、手紙文の慣用語句	153
五、敬語について	159
六、手紙を書く要領	160
七、便箋の書き方	163
八、封筒の書き方	165
九、手紙文の実例	167
第四章 書簡文(2)	178
一、年賀状	178
二、時候見舞い状	183
第五章 要約文	191
一、要約文とは	191
二、全体要約	191
三、大意のとらえ方	192
四、要旨のとらえ方	194
五、部分要約	196
第六章 随筆的な文章(1)	202
一、随筆的な文章とは	202
二、随筆的な文章の特質	203
三、随筆とは	204
四、随筆文の書き方の留意点	204
五、随筆文の実例	206
第七章 随筆的な文章(2)	223
一、感想文とは	223
二、感想文の内容	224
三、感想文を書くときの留意点	224
四、感想文の実例	226
第八章 随筆的な文章(3)	237

一、紀行文とは	237
二、紀行文の書き方の留意点	237
三、紀行文の実例	239
第九章 報道文	251
一、報道文とは	251
二、報道文を書く心得	251
三、報道文を書くときの注意点	252
四、新聞記事の文体特徴	253
五、新聞記事の構成	254
六、放送の原稿	255
☆放送原稿を書く時の留意点	256
七、新聞記事の実例	256
八、ラジオ放送のニュースの実例	262
第十章 説明文	269
一、説明文とは	269
二、説明の方法と順序	269
三、説明文の分類	270
四、内容の違う各種説明文の要点	271
五、説明文を書くための注意点	273
六、説明文の実例	274
第十一章 契約書・協議書	291
一、契約書・協議書とは	291
二、契約書・協議書の文章構成	292
三、契約書・協議書の内容	293
四、契約書・協議書を書く時の注意点	294
五、言葉の使用について	294
六、契約書・協議書の実例	296
第十二章 報告文(レポート)	312

一、報告文とは……………	312
二、報告書を書く要領……………	313
三、報告書の実例……………	313
四、学生のレポート（リポート）について……………	315
五、レポートの実例……………	318
第十三章 論説文……………	335
一、論説文とは……………	335
二、論説文の三大要素：論点・論拠・論証……………	336
三、論証の方法……………	338
四、よい論説文（意見文）の必要条件……………	341
五、論説文を書くときの留意点……………	342
六、論説文の実例……………	349

卒論篇

第一章 卒業論文を書くための準備……………	365
一、卒業論文とは……………	365
二、卒論を書く目的……………	366
三、卒論作成の資格とその審査……………	367
四、四年制大学（本科）学部生の卒論の性質……………	368
五、卒論テーマの範囲……………	369
六、卒論指導の教師の役割……………	370
七、卒論作成の時間と段取り……………	371
八、卒論テーマの方向付け……………	371
九、よい卒論を書くためには……………	378
第二章 卒業論文の書き方……………	384
一、論文を書く手順と時間割……………	384
二、論題の選定（トピック選び）……………	385
三、資料探し……………	386

四、資料研究（分析と整理）	387
五、アウトラインの発展	388
六、アウトラインの決定	389
七、アウトラインの実例（日本人の大学生のもの）	391
八、下書き	395
九、論文全体の構成	396
十、チェックと推敲（最後の総点検）	400
☆チェック項目☆	400
十一、その他の説明	401
十二、清書（出来上がり）	407
十三、卒論の審査と評価	407

付 録

一、接続語句の種類	410
二、参考書目	414
三、練習問題参考答案	417

準備篇

第一章 文章を書くための基礎知識

第一節 文章と文体

一、文章とは

文章とは大体、人間が言語、特に文字によって自分のまとまった思想や感情或いは陳述を表現したものであると言うことが出来る。人々は自分の心にあるものや客観的な事物に対する見方を表現し、それを人に伝え、それによって人の心を動かそうとするために文章を作るのである。文章はふつう幾つかの「段落」に分けられる。ただし、一つの段落が一つの文章をなしている場合もある。また段落が幾つかの「文」(つまりセンテンス)からなっている。これも一文が一段落となっているときがある。さらに、この文がまた幾つかの「語句」から成り立っているわけである。つまり、文章——段落——文——語句(連文節・文節・単語)というふうに分析することが出来る。

また文章は全体としてまとまりを持った統一体であるから、主題によって統一されていなければならない。主題がはっきりしていないか、幾つかの主題が併置されている場合は、文章の語

ろうとする目的がはっきりしなくなるから、文章を書くときは
先ず主題をはっきり持つようにし、適切な順序や筋道を立てて
書いていくべきものである。

二、文章の種類

人間の社会生活の中には、政治・経済・軍事・教育・科学技術・新
聞報道・公用事務・文学芸術・日常社交など多くの分野があり、各
分野での言語活動や互いのコミュニケーションもまたそれぞれ
の特徴がある。それに応じて作られる文章も色々違う。文章は
その目的や内容、形式などによって数多くの種類に分けられる。

A.)先ず文章の作られる時代によって分類すると、古典文と
現代文の二種類に大別される。これは大体明治時代を境
に分けられ、明治以前の文章を古典文、それ以後の文章を
現代文と考えられる。また文法上の規則と語彙的な性格
から考えるとこれは大体文語文と口語文とに当たる。

B.)次に文章の形式(韻律性の有無)から分類すると、韻文と
散文に分けられる。

韻文——(詩歌)短歌・俳句・川柳・新体詩(自由詩)など

散文——随筆・小説・日記・紀行・論説・評論・記録・報道・報
告など

C.)また文章の用途の面(表現意図)から分類すれば、文芸的
文章と実用的文章に分けられる。文芸的文章は言語表現
それ自体を目的とするものであり、実用的文章は言語表
現を手段として実用上の目的をはたそうとするものであ
る。

文芸的文章——小説・物語・随筆・紀行・詩・短歌・俳句・戯
曲台本・シナリオなど

実用的文章——日記・書簡・説明・議論・報道・契約・学術論

文・公用文書・報告・記録・宣伝広告など
両者の性質を合わせ持つもの——日記・随筆・紀行・書簡・
文学評論など

D.) 表現内容の規制から考えて分類すると、叙事文、叙景文、
叙情文、描写文、説明文、論説文、感想文、紀行文、議論文、
紹介文、依頼文などがある。

E.) さらに文章の記述目的から分ければ、叙述伝達の文章と
説得勧誘の文章に分けることもある。

叙述伝達の文章——叙事文・記事文・説明文・報道文・書簡
文、伝記文など

説得勧誘の文章——議論文・勧誘文・宣伝広告文など

F.) 伝達の相手によって分類すると、特定の相手に向ける文章
と不特定の相手に向ける文章と書き手自身のための文章
に分けることもできる。

特定の相手に向ける文章——通知・報告・契約・書簡

不特定の相手に向ける文章——報道・解説・論説・規約・広
告・課題と解答

書き手自身のための文章——備忘録・日記など

G.) その上、文章の記述態度から考えると主観的文章と客観
的文章に分類することもできる。

主観的文章——叙情文・感想文・書簡文・日記文・随筆文など

客観的文章——記事文・叙事文・説明文・論説文・報道文など

H.) この外、文章の記述心理から見ると論理的文章と情緒的
文章に分けることも考えられる。

論理的文章——説明・論説・論文・レポート・新聞記事など

情緒的文章——小説・随筆・短歌・俳句・詩など

I.) なお、文章をその媒材としての運用言語の差異すなわち文
字言語(書き言葉)か音声言語(話し言葉)かによっても分

類できる。

文字文章(書き言葉・目への文章)——新聞記事やその他全ての記述文章

音声文章(話し言葉・耳への文章)——放送関係・演説・講義・対談・会話

J.)使用する文字の別によって、漢字仮名混じり文とかローマ字文とかいう類別もある。

三、文章の文体

文章の文体はまたスタイルと言って、文章の様式・特徴を言うもので、一般にマクロ文体、ジャンル文体、個人文体、文末文体などに分けられる。

マクロ文体はまた巨視的文体論と言って、文章・文体の一般論や文章史の大きな流れに関するものである。現在一般に使われている口語文体が成立するまでの文語文体には、漢文体、和文体(雅文体・擬古文体)・俗文体・漢文訓読体(漢文直訳体)・和漢混交体・雅俗折衷体・候文体・美文體・普通文体・言文一致体・翻訳文体などいろいろの文体があった。たとえば「比喩表現の諸相」「平安女流文体の特色」「言文一致体の成立」などの論文はこのマクロ文体に関するものであると言える。概ね用いられる語彙の性格や文字表記などに応じて類別をなされた。

ジャンル文体というのは文章の部門・様式・形式・内容によって文章を典型的にとらえようとするもので、種類の違う文章の特徴を指すのである。例えば、「日記文の文体」「書簡(手紙)文の文体」「報道文の文体」「論説文の文体」「公用文書の文体」などがそれぞれである。我々のこの作文の授業では主にこのジャンル文体について考えることが多いのである。

個人文体というのは主に特定の作家個人やその文学作品、特

に小説を対象にその文章表現の個性的構造を解明しようとするもので、作品の中の用語・文型・文法・修辞などに見られるその作者特有の資質・気質・性格などの特徴である。例えば「芥川の文体」「徒然草」の文体」「森鷗外の文体」「川端康成の文体」というように、文体は文章の個性であって、人間各自の性格が違うのと同じように、名作家はそれぞれの文体特徴を持っている。例えば、

夏目 漱石——初期の作品には漢語調や低回趣味・対比表現が見られる。

谷崎潤一郎——割に長い文を好む冗漫型で、平安期の作品を思わせる。

芥川竜之介——比喻や警句に満ちた表現で、現実を鋭くえぐる。

志賀 直哉——文の長さが極めて短く、正確で簡潔な描写を特色とする、きびきびした端的型の文章が多い。

川端 康成——論理を越えた、吐き出すような文が新鮮な感覚を与える。

太 宰 治——型破りの口調の中に傷ついた魂への語り掛けが見える。

大江健三郎——主語を省略しない、翻訳的なスタイルで、特異な世界を描き出している。

文末文体とは、現代文に使われている口語文を文末の語法的特徴から分類するもので、一般に次のような種類に分けて言うのが普通である。

A) 常体(普通体)

a. 「だ」体

話す調子で書くもので、日記(場合によっては随筆・小説)